

洋  
雜  
記  
貳

洋学文庫  
文庫 8  
C 309  
2



西洋雜記卷二

目錄

聖人美瑟モセスの説

ギリキス國の名畫の説

取火鏡を以て敵船を焼く説

天下の奇女といふ説

入ル馬泥亞國マニヤに異獸を得たる説

和蘭國ホルランドの海中の女人を得たる説

波尔杜瓦爾國ポルトガ識記の説

伊斯把你亞國イスパニヤ人呂宋國ルソンを奪ふ説



附 テイリュス國女王カルタゴ城を築く説

西洋曆法の説

西洋天文の原始

西洋上世鬼神の説

西洋圖畫の譬諭を説く説

亞細亞亞弗利加の像の説

ギリフヒウンの説

弗尼思鳥の説

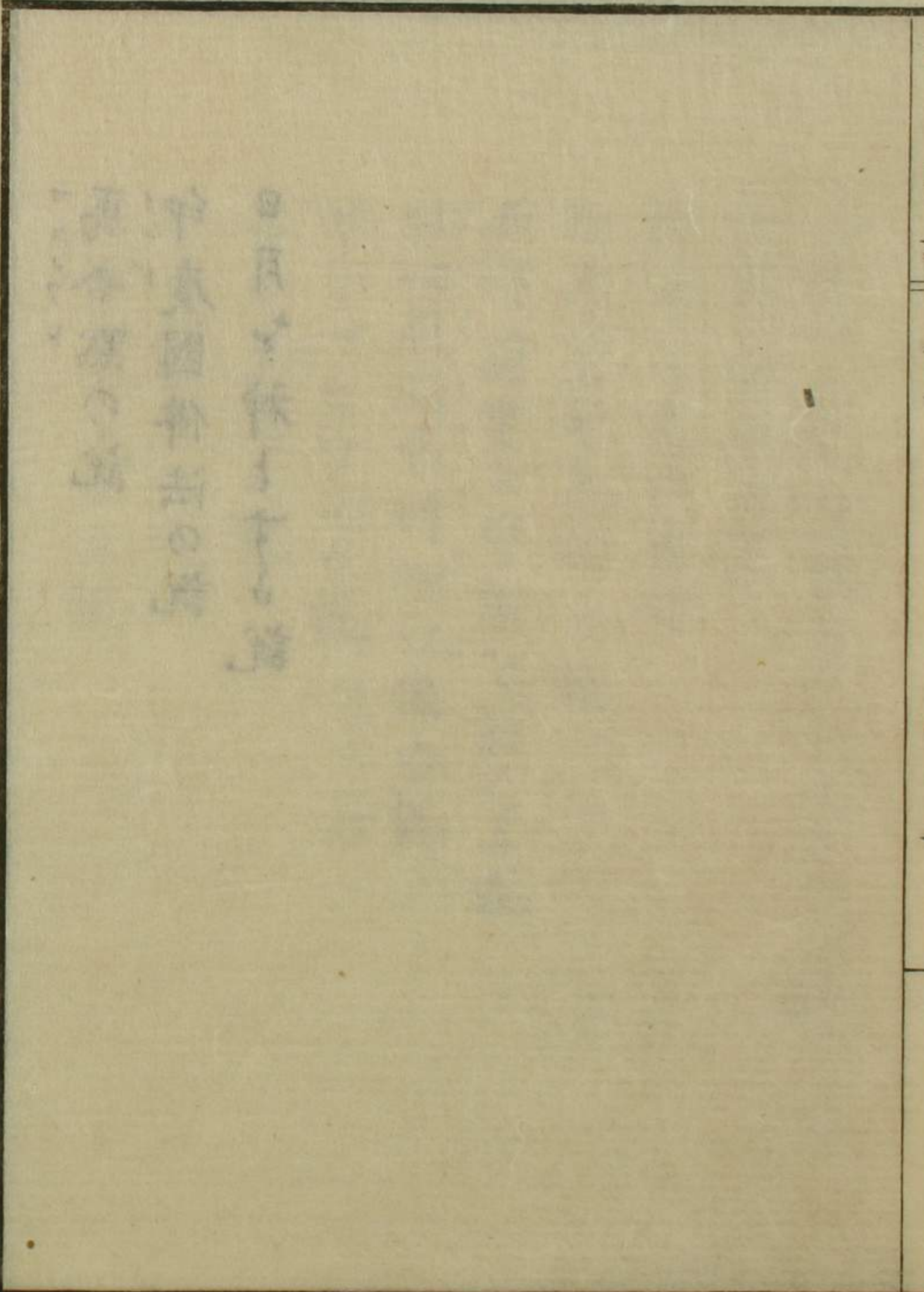
替没辣山の説

セ井レテ子ニの説

馬<sup>マホメット</sup>哈默の説

印度國佛法の説

日月を神とする説



西洋雜記卷二

聖人美瑟の説

勝保民曰此書



昔西洋中興の時を去るまゝ一千五百年前今を去るまゝとハ三十三  
百餘年前より唐土夏殷の世の間當る小如徳亜國ゴデアは大聖人あり美瑟モセス  
といふ聖徳神靈ゴッドよりして諸國の人とな其教ゴッドは化す後  
は厄エラ入多國トに到りて教を施すは國人とな信ゴッド後す國  
王ゴッドの事を怪み悪ニクく兵を遣ゴッドはるを害せんとい  
衆人すなむち美瑟モセスを保護モセスして東モセスに向モセスりて去る國  
王モセスより怒りて大軍三十六萬を興モセスして是を追モセスはる

西紅海イデよりくる。此時海水忽モに開けて陸地となり。美瑟モセス等衆人エを渡り去る。既入多國王の軍卒も追いつてきて是を渡す。海の半に至りし。天より忽モに狂風を起し、暴雨を降し、海水大に湧き揚りし。三十六萬の大軍一時溺死せり。是より美瑟モセスハ亞刺比亞國アに至りし。天その徳デに感カず。甘露を雨アらさず。是を賜ふ。古きより此甘露カは至りて絶へずと云ふ。此他一生の間奇異の事跡甚多し。と云ふ。美瑟モセスが撰センす所とあるの典テン礼法制の書および上古の歴代史記等皆今の世に傳ツせり。諸國の規模

とす美瑟モセスの墓ミ如ニ德テ亞國アの深山の洞中ドウチュウに在り。諸人恒ツにホ至りし。礼レ拜ハを行ハふと云ふ。

按ニ、古コきキにニ甘露カンロハスたラをチ云フ所ヲ云フ所ニハイハユルヲ謂フ。西語「マンナ」す。ホーニフ。ダーウニ。和蘭語「ホーニフ」ハ密ヒ多タなり。今多く亞刺比亞國ア。よび亞非利加の地チに産ハれ。又歐羅巴洲オウロバ拂郎察フ郎察ラ國中の「ダウヒ子コ」ハ子コの祿食ロクシキハ供キとるの地チなり。内「ワレアンソン」ハ地チ。毎年八月ニ至リきニ。エウエリックエハ樹ジュの甘露カンロなり。然シレウエリックエハ樹ジュ上ニ降ルるニ。最多ニ。その降ルるの始めハ露ロなり。

いへども忽に凝りて脂の如しその味砂糖異  
ちらびに國人ちきを珍重すと云ふ

「ギリキス」國の名畫の説

昔「ギリキス」國アレキサンデル大王の畫工セウキレス  
と云ふの、ききめりて圖畫は巧なり、ついで大王の命によ  
りて蒲萄を畫く、その彩色形状宛然として真の如し、  
ちきを壁上に掛る時、窓外の禽鳥ちきを見て、皆以て  
真の蒲萄なりとて、相聚まりて、毎にちきを啄まん  
とせしとなり、畫圖の巧妙に至りて、萬國すべし相ら  
ちらびと云ふべし

取火鏡を以て敵船を焼く説

昔西齊里亞島「セイラキユサ」國王の天文師アルキメ  
得斯といふ者ハ資性靈慧にして、事をなすを殊に其妙智  
人意の外に出づ、國王是を重んじて、匠作大監の職を兼ち  
む、ある時羅馬國と比産齊何國と兵を合せてセイラキユ  
サ國を併せんとて、數百艘の大船を泛せり、西齊里亞に海  
上は陳れ、其兵勢甚盛りて、島中の人皆震ひ恐る、此時  
アルキメ得斯一個の大なる取火鏡を鑄り、是を敵船  
の向ひ来る海岸の岩上に置き、天日を照して敵船を  
むらむ、鏡光と日光と相照して、光發し海上悉火を成りて

數百艘の兵船一時よしくく燒盡して一艘も留めず  
 となり。その亞爾幾墨得斯ハ天文測量の事、其志  
 きをめて深くして、その後臨終の時までも尚測量  
 圖を地ニ畫エガたながら終りしとなり。此鏡を以て敵  
 船を燒くことをハ、シン子ベルデンハニ。キリストレイキ  
 。ホルストトトト書し其圖説あり。オホイスと  
 いふ人死撰の學藝全書にも、ほゞ其事を記し。又亞爾  
 幾墨得斯ハ國王の命よりして、極めて大なる船を造  
 りし事をも、萬國航海圖説ニ記す。然まども此説を  
 森島氏紅毛雜話の中ニ、其譯文を載し、故に是は贅ゼイ

せい

天下の奇女といふ説

昔羅馬のコンスタンチニウム帝の世に當りて、百兒西亞  
 國主オデナチイ其勢まゝ盛なり。其后セノオビア  
 猛勇絶倫にして、衆は畏服し。學才殊に秀て、  
 よく既入多。西利亞厄勒奈亞羅甸等諸國の文字言  
 語に通じ、恒に其夫王と共に兵を用ひて、諸國を征伐し、  
 陣に臨むごとく、奇計を以て敵に勝つとつとをなす。  
 遂に大業をなして、世に東方諸國に雄長たり。世に  
 是を稱して、ウランドルフロウーパン。カンツセ。ウエレル

ト」とりふされ天下の奇女とつゝ義なり

入ル馬泥亜國ゼルマニア異獸を得る説

サルツ・ビュルグハハ入ル馬泥亜國の「ベイエルス」道に属す

るの地より其國山岳多し僧官の主あり是を治

む西洋中興第一千五百三十一年日本享保四年唐土明の嘉靖十年辛卯

小獵人此地の深林において一箇の怖るべし形状の異獸

を得たり全身毛を毛が濃厚にしてその色淡黒四

足を具して爪を鋭く尖利し頭面ハ少くも人小

異なり一度吼るホユときハ其聲地を震ふ獵人生るが

ら捕へる僧官の府城に輸れ皆以て奇觀なりとす

然るも絶く飲食せし其性情および食料得て量りハカ  
知るガるハ凡三日タして斃るマといふ

和蘭國ホルラント海中の女人を得る説

西洋中興一千四百零三年日本應永十年唐土明の永樂元年癸未

國「フリース・ランド」の人その部内の「ピエルメル・メエル」と

いへる海湾の水中に於て一の異物を得たり其身體

形貌すべし女人より少し異なるものなり則是を「ハー

ルレム」阿蘭陀國中都會の地に小送るオ身カを衣服をオけテふキバ則着

て飲食をオたスふキバ是を食ふオうハ啞オうハてオのハいハと

とあハるハばハ神像を見ミバハ敬オを起スと



俯伏し國王の命を憐れりつ奇たりして豊<sup>ニカ</sup>衣食を給ひ存活するも多年あり。其れ人<sup>ニ</sup>似て人<sup>ニ</sup>似らば其性情おどび海中に在るハ其のいばる所の在り。何となすその名もや知るべし。怪むべし。

按<sup>レ</sup>明儒の翻譯しる萬國圖説おどび坤輿外記<sup>ニ</sup>二百年前西洋唱蘭達把の海中<sup>ニ</sup>一の女人を得る<sup>ル</sup>を記<sup>ス</sup>るもの即是あり西書<sup>ニ</sup>ちまき<sup>セ</sup>エメ<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>海人とい<sup>ハ</sup>又<sup>セ</sup>エ<sup>ニ</sup>フロウ<sup>ニ</sup>海女の義と記<sup>ス</sup>り。すく<sup>ニ</sup>按<sup>レ</sup>浴聞記<sup>ニ</sup>魯神録<sup>ニ</sup>續墨客揮犀<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>海人の事<sup>ヲ</sup>説<sup>キ</sup>草木子<sup>ニ</sup>金の時

は水中に人の形現<sup>レ</sup>る事<sup>ヲ</sup>論<sup>ジ</sup>て水<sup>ニ</sup>もまゝに人類ある<sup>ル</sup>を<sup>ハ</sup>函明<sup>ニ</sup>相隔<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>べしとい<sup>ハ</sup>る言<sup>アリ</sup>。蓋<sup>シ</sup>人魚の類<sup>ナリ</sup>。人魚の事ハ六物新志<sup>ニ</sup>詳<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>贅<sup>セ</sup>也。

波<sup>ハ</sup>爾<sup>ト</sup>杜<sup>ガ</sup>尾<sup>ル</sup>國<sup>ノ</sup>識<sup>シ</sup>記<sup>ノ</sup>説

西洋中興一千七百五十五年<sup>ハ</sup>日本寶曆五年<sup>ハ</sup>唐土清の<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>爾<sup>ト</sup>杜<sup>ガ</sup>尾<sup>ル</sup>國<sup>ノ</sup>ヨ<sup>リ</sup>セ<sup>フ</sup>ス<sup>ノ</sup>第一世<sup>ノ</sup>王<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>名<sup>ヨ</sup>セ<sup>フ</sup>ス<sup>ノ</sup>ユ<sup>マ</sup>ニ<sup>ウ</sup>ル<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>國<sup>ハ</sup>ヨ<sup>ハ</sup>ン<sup>子</sup>ス<sup>ノ</sup>第五世<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>太子<sup>ノ</sup>の世<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>て其國都<sup>ニ</sup>里<sup>ス</sup>波<sup>ハ</sup>亞<sup>ハ</sup>城<sup>ニ</sup>大地震あり<sup>ク</sup>城垣<sup>ハ</sup>崩<sup>レ</sup>壞<sup>ス</sup>都内<sup>ノ</sup>人家<sup>ハ</sup>摧<sup>レ</sup>倒<sup>ス</sup>もの凡<sup>シ</sup>五萬餘家<sup>ニ</sup>城下の得<sup>テ</sup>差<sup>ト</sup>し<sup>テ</sup>る大河<sup>ハ</sup>浮<sup>レ</sup>め<sup>ル</sup>大船<sup>ハ</sup>壹艘<sup>ニ</sup>海水<sup>ハ</sup>鳴<sup>ク</sup>動<sup>ス</sup>隨<sup>テ</sup>く小山<sup>ノ</sup>の樹<sup>ハ</sup>掛<sup>ル</sup>地震<sup>ノ</sup>の響<sup>キ</sup>を<sup>ハ</sup>入<sup>ル</sup>瑪<sup>ニ</sup>尼<sup>ハ</sup>亞<sup>ハ</sup>拂<sup>郎</sup>

察等の地よきまも實は近世の奇變たり。初波爾杜瓦爾ホルトガ國の始祖ヘンリキユスと云ゆれ此國を開基して里西波亞の城を築く時賢者未來の事を前知する者ありしとく此城造建より後よく六百六十六の數を保つべしと其事ヨハン子スと云る人の紀錄に載せありその是を築きしものハ中興第一千零八十九年の事なり日本寛治三年唐土宋の哲宗元祐四年己巳はゆゑるとて此地震の時よ至るまで凡六百六十六年たりといふ嗚呼奇といふべし

伊斯把你亞國人呂宋國を奪ふ説  
附「テイリュス」國女王「カルタゴ」城を築く説

呂宋國ハ亞細亞洲南海非利皮那諸島の一なりてその地最大なり土氣暑熱して多く米穀諸菓胡椒肉桂砂糖黃金真珠等を産び西洋中興の千五百七十二年日本の元龜三年唐土明の隆慶六年壬申は當る伊斯把你亞國の人併せしちを有ち都督を置しちを治め僧官を署して教を布く明世諸書にたりしとく伊斯把你亞人舊本は佛郎機は作る也ハ誤なり今是を改む此國は通商し其國兵弱くして奪ひ取るべしを計りて則黃金を其國王に貢して牛皮の覆ふほどの地を得て是は居らんことを請ふ王是を許り伊斯把你亞の人則牛皮を細く長く裁いて線となり是を以て多の地を

廻繞クイヨウして、あつて、城郭を建ち、兵備を嚴重し、王を如何タラシとす、とあつて、其後、遂に兵をとりて、國都を圍み、王を殺して、其地を據るといふ、まゝ、鄭居仲が撰するところの鄭成功傳に、和蘭の人、臺灣の地を據るの事を記し、その牛皮を裁るの事、まゝ、是は同一、再西史を按ぶ、昔、テイリユス國の女王ギトといふもの甘的デア亞島アハに併じ、遂に「アフリカの地」より、金寶を其土酋に遺り、因り、牛皮の覆ふほどの地を乞ひ得て、牛皮を細く裁り、線となりて、多くの地を圍む要害堅固なる都城を築き、まゝ、「カルタゴ」と名け、是を基本

となりて、次第に其邊の諸州を併せ、ついに、まゝ、西洋開基第三千零八十年の事として、唐土周の厲王十一年癸巳に當り今を距るまゝと二千六百二十五年前あり、蓋、伊斯把カシ你ニ亞アも、和蘭の人、此女主の故智を用ゐたるものなりん。

西洋曆法の説

曆法は「ゾン子」ヤール「マーン」ヤールの二種あり、ゾン子は日なり、ヤールは年なり、まゝ、太陽の曆として、日の躔度ドは、因り、年をまゝ、一時を分つ、如、徳シ亞ア歐ウ羅ロ巴バ厄エ入ニ多ト等、其曆法は、まゝ、マーンを月なり、是、太陰の曆として

月の圓缺エンケツより年をなす。時を定む。唐土天竺アラ比亜ビ等の法ビより年をなす。太古へブレウスビの曆法ハ太陽の曆よりて其正月を號して「ニサン」といふ。是今の西洋の三月と四月の間は當るといふ。羅馬國の始祖「ロムリ」ス鴻業を開きて王位に即き制度を建て正朔を改め一年を分て十箇月となす。今の西洋の三月をりつて正月となす。其後「ユマ王」の世に至りて改めて今の如くは十二箇月となす。然るに毎月の日數今とハ異なり。四月四月を二十九日とする類なりとす。其後「ジュリウス」カーエサル帝チウロツ歐羅巴洲を一統をパよりて始て今の如くの日數と定

めり。今西洋の元旦ハ此方の冬至よりして第十一日此比は「イウエ」を稱して「ニイウウエ」ヤアルス。ダックといふ。すなわち新年の日といふ。義なり。正月を「ヤニユアレイ」といふラテニ語る以下同。日數凡三十一日あり。和蘭語一名「ロウ」マ月ントといふ。此月二十三日小日輪廻りて寶鏡宮の初度よりす。二月を「ヘブリユアレイ」といふ。日數二十八日あり。和蘭語一名「スフ」ク生ル。マ月ントといふ。此月二十九日あり。世ハ此月を二十八日とありて「アウグスト」の月を三十一日とあり。是「ジュリウス」カーエサル帝の例を用ゐるとなり。三月を「マルト」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名レ

ンテ。マーント月と云。

四月を「アツプリル」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名「カラス」草。マーント月といふ。アツプリルハ上古の世の神人の名より。その神海泡うぶより出づ。此月「ギリキス」國るは現るてくるよりその名くといふ。

五月を「マーンイ」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「ルウイ」祭生。マーンド月といふ。一よつとく「マーンイ」ハ花の名より。此月ハ何れも開く故なりといふ。

六月を「ユウ子井」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名「ソメル」復。マーンド月といふ。

七月を「ユーリイ」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「ホラ」草名。マーント月といふ。古ハ此月三十日なり。ユウリウス。カール。帝の世。改めテ三十一日とせり。

八月を「アウグストス」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「オックスト」マーンドといふ。此月二十三日ハ太陽廻りる室女宮に至る。此月古名「セキステリス」といふ。その第六とソへる義より。昔ロムリス王の世より。今の三月を以て正月とせり。又此月ハ第六月ハ當り。故なりといふ。アウグストスハ其後の王者の名より。此月を以て即位せり。より。月名を改め名けしなりといふ。九月を「セプテムベル」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名

「ヘル<sup>秋</sup>フスト。マ<sup>月</sup>インド」といふ。ラテン語を「セプテム」ハセといへる義なり。あま今世に至りては高ロムリユスの時の舊稱を改めさるるべし。以下十月十一月十二月

皆是は同トなる也

十月を「オクトラベル」といふ。日數三十一日あり。ラテン語「オクト」ハ八あり。和蘭語一名「ウエ<sup>酒</sup>井<sup>酒</sup>ン。マ<sup>月</sup>インド」といふ。十一月を「ノオヘムベル」といふ。日數三十日あり。ラテン語「ノオヘム」ハ九あり。和蘭語一名「スラクト。マ<sup>月</sup>インド」と云。十二月を「デセムベル」といふ。日數三十一日あり。ラテン語「デセム」ハ十なり。和蘭語一名「ウ<sup>冬</sup>井<sup>冬</sup>ンテル。マ<sup>月</sup>インド」といふ。カアール。ゴロオト帝の世より。此月の別名を「エイリゲ。

「マ<sup>月</sup>インド」と號し。是聖月といへる義よりて。むう。聖人某なるもの。此月誕生し。故なりといふ。

以上十二箇月三百六十五日六時なり。四年ハ一度二月を二十九日となし。て。壹年三百六十六日となる。彼方よりハ一晝夜を二十四時ハ分ち。子の刻より午の刻までを十二時となし。て。午の刻より子の刻までを十二時となす。その法ハ上古の世ハ<sup>エ</sup>阨<sup>多</sup>國より傳へ

阨<sup>多</sup>國の曆法より。太陽の曆なり。一年十二箇月三百六十五日より。餘る時刻分秒なり。毎月各三

十日よりして、ちび十二月の三十日となす。  
亞刺比亞國の曆法ハ、太陰の曆なり。一年十二箇月三百  
五十四日八時四十九抄なり。三十年は十一閏を置く。  
但し閏ハ此方の閏月よりちび閏日より一年三  
百五十五日とするをいふなり。

都兒格國又此曆法を用いし。梅は夏暑冬寒は知らぬ。  
一年をちびのちびなり。

亞刺比亞の十二箇月ハ「エハルラム」正月「サハル」二月「ラヒ  
ア」フリオル」三月「ラヒア」ポステリオル」四月「ヨマダ」フリ  
オル」五月「ヨマダ」ポステリオル」六月「ロヤアラ」七月「シカア  
ハレ」八月「ラマダン」九月「シカワツル」十月「テュルカシダレ」十一月

チユルベツシア」十二月なり。然して毎年正三五七九十一  
の六箇月ハ各三十日よりして、二四六八十二の六箇月ハ  
各二十九日よりして、合せて三百五十四日なり。時と  
て十二月ハ一日を加へ、三十日となりて、三百五十五日とな  
りあり。

天竺よりハ月の圓なる時を以て月首とゆる。支  
那の諸書より出づ。或誤りて天竺ハ朔望とも月首  
ともいふ者あり。笑ふべし。  
真臘今の東よりハ支那の十月を以て歳首とて閏歳  
ももす。かなづち閏を置。但是閏九月なりと真臘

風土記に見へり。

西洋天文の原始

西洋天文星象の學ハ上古の世ハ厄ハ多國ハ於テ始めて是ヲ造作セリ。其邊ヲ彼方諸國天學の權輿トシ。天竺の天文も蓋彼方より傳へたるものと云へて十二宮のト不空三藏所譯の宿曜經ハ云ふなり。但一二十八宿を日月ハ配するハ決して天竺の説ハ何らざる。二十八宿の事ハ支那古聖の定むるところにして天竺より悉是ヨ同ドなる處キ理ナリ。其邊ハ不空ハ牽合附會せるなるべし。其邊ハ不空ハ古來

翻譯の佛書の中ハ附會の説定めて多きことと思はる。

西洋上世鬼神の説

西洋諸國上古の世より一聖人多ク興アテ教ヲたつとソレトシ。昔時ハ種ニの鬼神ヲ尊信する。其奇異怪誕ハハ奇異なる譬喩の類キ。其邊ハ羅馬國ハ於テ上古の世ハ「ユピイテル」<sup>オビシス</sup>「子ブトニウス」<sup>アホツロ</sup>「マルス」<sup>軍神</sup>「メルキュリウス」<sup>歳星</sup>「ヒュルカニウス」の六の天神。其邊ハ「ユノ」<sup>子ルハ</sup>「ヘニス」<sup>太白</sup>「チアナ」<sup>セレフ</sup>「ヘスタ」の六の天女ヲ崇信ス。



合称「コンセンテス」といふ。此十二神を各月配す。また黄道十二宮に配す。のち「子ルハ」を白羊宮に配し、「ヘニユス」を金牛宮に配し、「アポッロ」を雙瓶宮に配するの類なり。日月五星四元行等も其像あり。羅馬國よりつて上古の世は圓形の大殿を建ち、熒惑太白の二神を奉り、其他種々の鬼神を附祀す。其巧妙美麗世に名あり。此殿を名け「パントニ」といふ。此殿今尚存す。然しどもコンスタンチニムの大帝的の世より前奉ずると云ふの諸神を除くこと云此他諸國にも此等の諸神を奉り、然し「厄入多」祭るものあり。像も種類最多といふ。厄入多國人

の説よりいへば、太古の世は「ケエフ」といふ尊神あり。其口中より一卵を吐く。全世界此卵より生る。是れ世界開基の始なり。故に其像巨大にして、手は卵を捧ぐるもの形をなす。まゝ「セイヘレ」といふ女神あり。天を父と、地を母と、生を鎮座の正妃となり。諸神も此の生むところなり。故に號し「神母」といふ。また天下の諸獸も此神の聲音氣息より生むところなり。其像頭は寶冠を戴た手は一の鎖鑑を把り、百花を衣となり。諸獸恒にその傍に圍繞れ、あるは時として寶車に乗り、四の

獅子車を駕り又ギリキス國中「ペロポ子ンニス」の地はあつて一の歳星の祠を建つ其莊嚴美麗なるを紙筆に竭す<sup>ツ</sup>盡う<sup>レ</sup>びみな黄金諸寶石を以て飾しつ其巧妙精密世は絶<sup>ズ</sup>き<sup>レ</sup>り正中は歳星真形の極めて大なるものを安置し傍<sup>カスラ</sup>に諸神を附祀しあま天下七奇の其一なり又鎮星の女を「セレス」とし是を農神と称し「バツキユス」とし神と共に太古の世は耕農の業を人<sup>レ</sup>に授けしふより<sup>レ</sup>如此は称す<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>それ「バツキユス」としつものハ歳星の子として其状肥たる小兒の如し世の釀酒の事を護<sup>マモ</sup>る故に稱し<sup>レ</sup>と

酒神と称し又鎮星の子は「シロン」とし者あり其像半身人より半身ハ馬なりあまを<sup>ナニカ</sup>つ<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>此神は好んで馬に騎り弓矢を挾<sup>ナニカ</sup>し高山に登り<sup>レ</sup>衆の藥草を試みて其性功を區別して上世は名醫<sup>ナニカ</sup>も<sup>レ</sup>其他天象輿地の學を極め<sup>レ</sup>のち歿<sup>カフ</sup>す<sup>レ</sup>及びて其靈魂天に昇り<sup>レ</sup>十二宮中の人馬宮とな<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>がゆゑなり<sup>レ</sup>又歳星の女を「チアナ」とし世は是を獵神と称し此神通廣大なり一體三名あり天は在り<sup>レ</sup>ち「マーン」<sup>月輪</sup>と現<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>世界はあり<sup>レ</sup>ち「チアナ」と稱し<sup>レ</sup>地獄はあり<sup>レ</sup>て「ヘカッテ」と號し相傳ふ此

神夜ニ天より降りて其尊信する者よりよく福を賜ふ故に世は多くちを祭祀に然る其祠廟小亞細亞の厄弗俗國に在る所の者最世に名あり南懷仁の説や供月祠廟と云ふ所の天に在りて八月と現ぶるものあり其造建凡二百餘年より始めて成る中より一百二十七株の美玉の大柱あり其美麗巧妙人の心思の及ぶところあらばこれ今も去ると二千六百餘年前に亞瑪作榻の人建てしものなり此祠廟の事第一その巻にも既出なり他此類の諸神も多し或は羅馬國第二世ニユマホムヒリウス王の代に「チアナ」天よりく

降りて一の清泉を羅馬の地に湧出せしむ孕婦ありて浴するもの皆安産に王との靈應を尊じて祠廟を彼國に建し事ありとす或は上世に「テイホン」として一巨人あり其婦を「エキトナ」として半身ハ女として半身ハ蛇たり其生むる所の第一子を「セルベリウス」として三頭三縁の犬なりて地獄の門戸を守り悪人の靈魂地獄に墜つる者ありは則是を嚙むその他「ヘイタラ」「レルナ」「キメラ」「子ノアレ」等の諸子皆異形ありて然る中世に至りて聖人もありておほく出生して法教日々明る又コンスタンチニウムカール

ゴロート等の諸聖帝政令を定めて妖妄ヤウバウの浮言を禁  
 制し諸國の邪魔の窟及び種々の淫祠を悉破滅ソクハクして  
 より邪靈魑魅諸妖盡絶ゆ今に至りて邪妖の人や  
 迷マヒすこと少くなく則知る邪妖人はよりて興  
 らず誠は萬代不易の金言なるを也

西洋圖畫は譬諭を設くる説

西洋の畫圖のききめは縝密シニミツなり所寫の精妙  
 を致しることハ世は知るともあり然るに其畫中譬  
 諭をなすもの甚多しとてハ書籍の首は其撰者  
 の像を畫た傍に「エンゲル」羽翼ある天人と圖し或笛を吹

く形あるハ「エンゲル」の遠く飛び笛聲の遙し聞あゆ  
 るがごとく其撰者の聲價遠聞すべきの意は取るなり又  
 マーリンといふ人ハ拂郎察國の人なり拂郎察語フランドと和  
 蘭語ラントと戦合集し釋符書を著せり其後和蘭の  
 人ハルマと云者是を訂正し二國の釋符書  
 を著せり其首の圖は上面ハルマの像を畫れ下は  
 數箇の人マーリンを踏つぎすその傍は臭氣を避けて  
 鼻を掩ふ人ありその踏潰すはハマーリンの  
 書とすて新に訂正するの意を示し臭氣を避くるは  
 のハマーリンの書の紛雜コザフしからむを

示すれ意なり。其他此の如き類頗多し。予々彼邦の  
 昔より「ヒツポ。セントウクス」を以て異形の像あ  
 りたを其半身ハ人として。半身ハ馬なり。是ハ上古の世  
 は始めて「テツサリア」國「ギリキス」を屬する地を開きたる人あり。  
 此人を以て其地に至る時。馬は騎まり。その時  
 「テツサリア」國の地はハツすが馬と人とのなきゆゑ。  
 土人其色を見く大に驚き怪みて人馬合せて一體な  
 りと思へり。其後此人を以て土人を教化し。大に徳を施  
 して人となすは懐く。こゝよりして此人の始めて其  
 地よりくるる時の像を画き。且其徳の人を勝きしる

を表して。異形は飾を加へる者ありとす。予々  
 西洋より古人の肖像多く傳はり。西史の首二三  
 千年以来の名ある人物の肖像數百を圖せり。其中  
 は羅馬のコンスタンチン二世の帝の像あり。小傳の  
 下は記して曰。此帝の肖像を画れたるもの今傳たるは  
 然き。此帝の時所造の錢貨尚世に存し。錢文ハ  
 帝の面あり。よつて此は模寫なり。則知る其  
 他の肖像も。たゞ的實なる者よりして。あへて私意を  
 以て画きたるものもあらざるなり。

亞細亞亞弗利加的像の説

西洋の畫譬諭を以て亞細亞亞弗利加の二洲を圖して皆人の形と爲す其亞細亞ハ婦人として身は繡衣を衣て諸種の花菓を荷ひ右手小丁子胡椒香桂等の枝を把り左手は香爐を捧げウ井イロオク脂香名を薰ト駱駝その後ハ隨ふそれ亞弗利加もまた婦人として黒色裸體縮ナツ毛身ハ滿ち鼻ハ象と同しく頭ハ鳥羽ハタカを飾り右邊ハ獅子あり左邊ハ大蛇および蝮蛇ありちとせ其地方の産物を以て譬像を設くる者なりといふ

「ギリフヒウシ」の説

「ギリフヒウシ」ハ極めて奇異なる生類なり其體ハ四足を具然して前半身ハ全く鷲ウツとして翅あり耳脊ソコて長し前足もまた鷲の足あり後半身ハ全く獅子シとして尾長く後足も獅子の脚あり是北荒乃地ハ産するところなり其鷲ウツ猛りけるべからず然るも世ハ絶へて見ゆる者なり或ハソレ上古の世ユビ厄入多國の淫祠中ハ此像を設くけり寓言のこ

「フニニス」 弗尼思鳥の説

西利牙國の邊ハ一種の奇鳥あり弗尼思フニニスと名くこれ

其壽六百六十歳なり。則その壽の終らんとを豫を知  
 る。因て「ウ井イロオク」香桂等諸の香木の枝を以て巢  
 を作りて其上に居る。天氣熱するの日を待ち、太陽の  
 火を取て、自焚死し、其骨肉遺塊よりして一箇の  
 蟲を生ず。此蟲は化して「フニニス」弗尼思鳥となす。其  
 名は「フニニス」也。寓言よりして上古の世は「フウニシア」國  
 大國の一子孫傳統して、文華盛あるの意を以て、その  
 譬諭をなす。その名を「フニニス」也。

智没辣山の説

那多里亚國利細亞の地は大山あり。智没辣といふ此山

よ一種の異獸あり。頭ハ獅子よりして、身ハ野羊のごと  
 く。尾ハ龍と同しく。口中より火烟を吐く。其名を名  
 けて「ヘツレロホン」といふ。世は其圖を傳ふ。然るも其  
 名又寓言よりして、此大山其頂上恒は火烟を噴き、其  
 邊獅子多く、半腹ハ平行よりして、豊草繁行し、野羊  
 蕃息し、下邊ハ沼澤多くして、龍蛇住し、人なむも  
 一より是を怕き、往く者ありしを「ヘツレロホン」  
 といふ。異人始めて衆を帥し、此山を開きて、是に居  
 住せし。ゆゑに「ヘツレロホン」といふ。此事ハ「利瑪竇」著せし  
 坤輿全圖より見えたり。

「セ井レテ子」の説

「セ井レテ子」も海中に生ずる一種の怪物なり。その上體ハ婦人なり。下體ハ魚あり。よく魘魅の妖術をたもて。若其聲を發し。歌を唱ふ。如くたる時ハ。風波大き。興り。海舟を覆没。此物意太里亞國の属島。西齊里亞の海邊にあり。然るに唯此説を以て傳へ。世に其像を画きて。崇飾を加ふる者あり。とて。たゞ的實は此者あり。とをき。おぼけ。昔時の寓言なるらん。

馬哈默の説

回ニ西域大食國種也。陳隋間入中國。明丘濬曰。國在玉門關外。萬里其俗祀天。不為像。航海至廣州者。始其地創寺。禮拜金元以後。復建中國。所至輒相親守。其所謂教門者。尤篤。今在在。有之。職方外記。回國。中國之西北。出嘉峪關。云。初。宗馬哈默之教。諸

馬哈默マハムト元明諸書イハユルメデナ所謂默德那國王マホメット謨罕マホメット慕德ムトと云者。其建つところの教ハ。すなわち所謂回ニ教マハムトと天方教マハムトとつゝのなり。ヒプロ子ヒプロルスルス人の書に載すとあるを按ずると。馬哈默ハ亞刺比亞國の人なり。其父ハ佛教の徒母ハ「ヨーデン」の女なり。都エリユサレム城の廢せし時。其國人四方に散り。その子孫今「アジア」「エウロップ」「アフリカ」三大洲の諸國中に夥くあり。皆其上古祖先よりの教を奉じてあり。改めざる。是を總稱して「ヨーデン」と云。西洋中興の後第日本欽明天皇三十年。唐土陳の宣帝五百七十年。五月五日。亞刺比亞の默加ムカの地一年。唐土陳の宣帝に生る。馬哈默マハムトの業を嗣ぐ。大富の賈人より。其後「ヤコビチヤ」教の徒「バシラス」名「子ストリー」名教の僧「セルジウス」名と云ふ



國多同云ニ  
梓回ニ國名  
タリ今何レ  
ノ地方タルコ  
トヲ辨セス或  
亞刺比亞ヲ  
指スカ地馬  
哈默教ヲ修  
スレハナリコ  
教法ヲセホ  
メト稱スルモ  
多回ニ教トモ  
イハナリ又  
回ニノ音譯  
何トイフ詞  
ナルカ國名ナ  
リトモ聞エテ  
教法ノ名ナレ  
ベシ回ニトモ  
云フヘキトコロ  
ニ天方ト書

「ヨーデン」の人等も隨ひて道を學び諸教を混集して  
加ふるも、奇異怪誕の事を以て、遂に馬哈默教門を  
立て、亞刺比亞諸國に教を施し、アルコラン又コランといふ  
へる經典三十部を著せり。明人の説、其經有三十藏、その  
後六百一十六年日本推古天皇二十八年唐土唐の高祖武徳三年庚辰よりの七月十六日  
、默加メカより遷りて、默德那メデナにおいて歿し、壽六十二、因て  
其地は葬る。明人の説、隨の開皇年中、其國人始めて其教を傳へ  
哈默を陳隋より唐の世の初までの人なるも、隋の開皇中、其教  
支那に入るるといふと詳ならず、上の説は「子ストリア」ヤコビチヤ「ヨ  
ーデン」等の教を混じり馬哈默教門を建つと、梅は西書より、西洋中  
興五百年の比、子ストリアの教をカルデア、印度支那等の諸國に  
傳ふとあり、然るに隋の開皇中、支那に其墓、西紅海を去るまで  
入るの教ハ、子ストリアの教を云ふ。其墓、西紅海を去るまで

キカヘアルナ  
リ

三日程默加國王の都城を去ると四日程にして、遠近諸國の  
人多く是に至りて拜礼す。又此地は美麗なる大寺觀あり、  
あき明人のソくる天方あきの礼拜寺なるべし。その名を名け、「ミスクエ」といふ。あき至  
る其規制、方形にして、黒石を以て造成し、門あり、  
平野にも、皆白玉石を用ゐ、其外面長廊を造り、窓あり、  
柱は皆玉石なり、内にも夥く燈籠を掛く、皆甚大にして  
其高八九尺、或丈餘あり、外面ハ六の大塔あり、其内にも  
ナレーデンといふ塔最高しといふ。然るも其「アルコラン」の  
經文に載するところ奇説怪誕甚多し、計するも勝べから  
ず。その天堂地獄の事を説くや、曰、天堂に至るものハ未來永

劫歡樂を窮極し、少くもケンソク檢束ニラヘンカキレなく、美麗の少女毎日かましく、よきうて枕席を薦め、種ニの飲食美味芳潔なると供し、浴するも、乳汁香花の湯をりつて、居る。珊瑚明珠美玉百寶を以て造建する家の、宮殿樓閣を以てす。其地獄に墮する者ハ、毎日烹割ハウカウの千辛萬苦を受け、死ニキルしつて死し終世盡るまでありしつて、その他事も皆是に類し、おきとつて西洋の人馬ホメット哈默をいひ、ハルセプロヘト」と称し、おと假聖とよめる義なり。

印度國佛法の説

ホルランド和蘭の人ウツウテル。スウウテニスガ著ル、東洋行程記

よ曰、印度の諸國其人多く、ヘイデ子ヘイデ子の教を奉び、お奉ずるもの、その神像種ニ一なるべ按、ヘイデ子とは佛法のよき手らに種ニ異形の像を祀る。其中に最尊むもの、ヘイワラヒストニユム「フラマ」ラム」等の者なり。おと皆天中天なるもの、稱して「オフブルユツト」和蘭語、尊神とつて義之とす。其「イソラ」ハ一名「マハデ。ウー」といひ、其像をえり、皆甚巨大なり。形容甚奇なり。その頭面ハ人と異なることなり。とつて、三の眼あり。其一ハ額上の中央にあり。十六臂あり。種ニの物を把る。頰シヒに玫瑰クイおとび諸種の花を掛け、飾となり。虎皮を衣や

る。象皮を外套ウツキとなし。相傳ふ昔「イソラ」天より  
 て高山の頂より降る。此時玫瑰諸花芳香芬馥コク。諸鳥  
 妙音を發し。水土清浄より。奇相を現は。イソラ則  
 國人の教を施し。人ニ安樂得道せしめてのち。天  
 より昇る去る。いふ「イソラ」は配するの女神を「パシメ  
 スセンイ」といふ。其像姿容溫柔なり。配合して四子を  
 生む。これを稱して新神といふ。第一子を「クエナバチ  
 といふ。ワイケルセエ」砂糖海といふ義なり。極樂世界のるなり。い居る。その  
 主なり。其像體ハ人より異なる。いふ。その頭及  
 び牙喙カイとも。象に似て。然る。四の臂ヒダも。第二子

を「シリ。ハニマレ」といふ。此形容奇異なり。頗コソレ猴ミカウ  
 類に。此像則意蘭國より殊々多く是を奉じ。其他  
 の印度諸州および支那日本等の國に至るまで。此  
 像を奉じて。さきさき。祠廟を設く。第三子を「シユペ  
 ニニア」といふ。其像六面十二臂あり。第四ハ女神なるを  
 「パタラカリ」といふ。其像姿容美麗なり。いふ。八面  
 十六臂あり。耳より懸るる寶玉。以て。は。この大  
 なる象牙をもつて飾る。此像王國「カラシガノル」の  
 地におし。殊々多く是を奉じ。その「ヒストニユムハチ」  
 あり。一箇の尊神なり。此神神通廣大より。變化

方なり。故に其變形種二一なり。或半身獅子なり。或半身人なり。或一頭四臂あり。或美麗なる童子の形をなすものあり。此他變形尚甚多あり。ソ井ケル。セエ海。小居る二人の美女。これ傍に侍り。此神をまつるを世界の人を保護するを主トなり。其像人より異なる。觀世音。その「ブラマ」もまた尊神なり。其像人より異なる。其類。その「四の頭あり。或は是天地を創造するの神なり。其令は従ふとちろの大小の諸神多し。云々。これラムといふものハ。又名ラムモと云。按よ。此は新説なり。ヒプ子ルスが書よ。印度よりラムといひ。東京よりハシアカといひ。日本よりハシヤツカといふなり。是の聖人は

して初に主尊の位に居り。其妃シツタといふを辞して。道を學び。按よ。佛書よ。釈迦の出家をす。淨飯王の太子なり。其の妃の名を耶須陀羅女といふ。シツタもその音なり。近て考ふ。遂に一種の教門を興立して。東方諸國に教を施す。其神通廣大なり。といふ。あまたの外の「キスナ」「インゲル」「井ト」「ラツ」「カムダカ」等の諸神。又「ドルウ」「ペツテ」「テル」「インテ」等の諸神あり。國佛法を奉り。其奉するもの佛像甚多あり。百種の記せり。凡其教中より奇怪なるもの多し。或はヒストニウム一。一隻の大鷹の上座に。世界ハ其鷹の牙邊にあり。と。按よ。此大鷹ハ佛書よ。金翅鳥の類なり。又或曰。全世界

象ハ其乳一箇の大牛の頭上ヨリ。故ニ其牛たまく頭  
 を動揺すむを則地震何りと。按ヨ。三才圖會ニ佛書の説を  
 引ク。閻浮提ハ一の大鰲の背上  
 是ハ何リ。此鰲常ニ身の痒きを苦ミク。其鱗甲を動ク。子ノ或イ  
 セバ則地震ありトリ。よチヨリヨチヨリト相似ク。  
 中ヨリ生きニものなりト。又ソニ人死ニ其の  
 靈魂生きニ世ニ在リ。時ニ其平生善良なる者も。  
 樂界ニ赴ク。樂界ハハメルク。ゼエ乳ソイケル。ゼエ種  
 種千數何リ。それ悪き者ハ地獄ニ墮落ス。地獄ハ刺  
 棘キヨクの深井何リ。鉄喙タイの鴉カラス何リ。狩狩サウマイ人ヲを咬  
 食カの犬何リ。慘刺サイシするの蚊蚋カア飛蟲アチシあり。かゝるイ  
 ラス

此の者ニ種ニ千數ありト。又ソニ人類獸畜ノその  
 形状ハ皆異なりト。靈魂ハすたニ異なりト。  
 故ニ身死スト其生來の善惡ノよりテ。  
 業盡ゴフニバ再世上ニ生ス或人トなり。何ハ獸ヤ  
ナリ。かゝるイ奇異なる説ハ甚多クト云フ。

日月を神とする説

ホルランド  
 和蘭語ヨ。日月星辰等を謂テ「ナテユル。チイナアル。ゴッ  
 ト」と云フ。此ハ真の生神トなり。西洋の画ニ日  
 月を圖するハ。其中ニ人面の形をなすハ。其生神ト  
 ンヲ表すハの意なりト。然レ韃韃タルタリアの部中曠

漠の地は一國あり「ハンダイ」といふ其人つねに日を以て  
 神として、毎事是を祈る。又哆羅絨等の類の色赤きも  
 のを圓く裁いて空に懸け、日の像なりと稱して、是を  
 拜祀すといふ。又地理の書を按ずるに北亞墨利加洲北  
 花地の野人、まゝ北海新增白蠟の小人等、日月と神  
 として、おぼゆる。祈乞ひ、又亞非利加洲「ニギリシア」の内  
 は一國あり、寡蠟太といふ。其人他の鬼神を知らず、惟火  
 を以て神として、是を祈禱し、同洲「カウプルス」國も  
 風俗きまめて、卑くして、あつても禽獸に同し、故にうつろ  
 鬼神法教等を知らず、然るも、一種の晴雨を祈

る法あり、名けり「ホンメ」といふ。けごと、其人屋居を知ら  
 ず、多くハ洞穴に居る。或僅に木枝をあみ建て、巢とな  
 して、是に棲むが故に、晴を喜び、雨を愁ふ。ちと、うつろて天  
 り、晴る時ハ相聚りて、歡喜踊躍して、地の靈感  
 あり、若陰雨すと、ハ惱怒き、ためて、甚く罵詈雑言して  
 已まぬといふ

西洋雜記卷二終



